View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

仕事観の継承
――渡日１世の親から、朝鮮人（チョソンサラム）Aさん、そして娘へ――

橋本　みゆき

1．はじめに

何をもって在日韓国・朝鮮人２世というのだろうか。本稿で取り上げるAさんほか調査協力者たちと出会う中で、意外にもその答えは容易でなくなってきた。Aさんは、父親が渡日１世の朝鮮人であるが、生母は日本人、継母は渡日１世の朝鮮人である。

これまでの在日韓国・朝鮮人研究では、父親が渡日１世であればその日本生まれの子を２世と言うことに迷いはなかっただろう。最近まで韓国の父系主義的家族制度において母親の出自は子の戸籍に影響を及ぼさなかったし[1]、日本人嫁を迎えた在日韓国・朝鮮人家庭でも“朝鮮人の家に入ってしまえば朝鮮人の妻”として済ませる傾向[2]があった。

しかし在日韓国・朝鮮人の生活文化継承を研究テーマとし、主な調査対象を在日２世とする私たちの共同研究チーム（在日２世の高正子、ニューカマー韓国人の柳蓮淑、日本人の猿橋順子・橋本みゆき）にとってはやり過ごせない問いであった。あえて母方基準で世代を数えようと、当初暫定的に考えていたからだ。なぜなら、従来の父系血統主義的な世代観への疑問があったため、また生活文化の継承というとどちらかといえば母親の方の影響が大きいことが予想されたためである。しかし、母方で数えるとして、母が日本人だったらどう数えるのだろう。継母が来たら事後的に２世になるのか。紹介者や自称による世代規定にも意味があるように思える[3]。そもそも、父方でないなら母方カウントにすればよいという話なのか。思えば、世代を通じて私たちは何を明らかにしたいのだろう。新たな決めつけ世代論にすぎないのではないか、等々。現実の複雑さに触れるや、急ごしらえの観念的世代概念では対応し切れないことがはっきりしたのである[4]。とはいえ、生活文化の継承について考えたとき、Aさんに何らかの“2世らしさ”を覚えたのも事実である。渡日世代の親と生活を共にして多大な影響を直接受けたという自覚があり、そうした生活・文化がその子供にも伝わっている形跡があるからだ。

数ある生活文化の一つとして、本稿では仕事観を取り上げる。そしてAさんをひとまず「渡日１世の生活文化を継承する主体」として捉え、世代間継承の複雑さそのままを示すことにしたい。既存の世代論の枠組みとは違った形で、Aさんが生きる世代なるもの、実践・伝達する生活文化を具体的に描く試みである。まだ始まったばかりの移民第二世代論としても貢献したい。

次節では、何のための世代概念かという原点に返り、在日韓国・朝鮮人の生活文化の継承を考察するための世代という視点を検討する。第３節でAさんへのインタビューの概要を述べ、第４節で、Aさん自身の仕事経験および仕事観を３つに分けて語りを整理する。第５節では、在日１世の親からAさんへ、さらに娘への流れが見える仕事観を、Aさんのライフストーリーによって示す。そして、縦／横の世代関係の交差について若干の考察を加え、全体をまとめることにしたい。

2. 分析概念

在日韓国・朝鮮人2世の生活文化の継承の実態に迫るためには、世代という視点が重要である。特に在日2世の受容／非受容を考えるため、ここで2つの主要概念について検討しておく。

2.1 生活文化の継承

石川実は、いくつかの生活文化の定義を参照し、「生活文化とはあくまでも個々人が『自らの生命の持続を支えるための活動』の中から生み出したものであり、それが集団的に支持され、世代的に継承されたもの」とまとめる（石川 1998：10）。生活文化はまた、生命維持の手段（必要）およびうまく生きる・よく生きるという生命の質（価値）の両面に絡んでいて、ひとと、ひと・もの・こと・こころの有形・無形の関わりでもある（石川 1998：7-10、橋本ほか 2015：32-3）。それはどこかに「ある」ものというよりも、誰かが実践し、認識し、伝えるという人間の生の営みの中に見出されるものである。

生活文化の具体的実践・継承の場は主に、日常生活が営まれる家庭であるだろう。そのため生活の技法や思想は、他の家族と共通のものもあれば、当該家族独特の事柄もあると考えられる。在日韓国・朝鮮人の場合、日本生活への適応という局面もあり、したがって民族の伝統文化とは限らない。生活文化に注目する意義はむしろ、いかにも民族文化的であるのを確認すること以上に、在日韓国・朝鮮人の現実生活を反映した生活財や行動様式、価値観の意味を理解することにあるのではないだろうか。

日本人一般との違いがあるとしたらどこか、なぜそのような形になったのか、それはどう評価されてきて、世代が進むとどうなるのか。このように考えるとき、2世は要の位置にいる。出身社会の文化を身につけて移住した移住1世と、移住先で生まれた2世以降は生活経験や知識、参照枠が決定的に異なっており、まさにその繋ぎ目にいるからである。したがって、「2世であること」自体よりも、「1世からの受容と3世への伝達」が鍵になる。

そうした生活文化として本稿が注目するのは仕事観である。仕事観は、石川の暫定的な生活文化リストには入っていないが、米山俊直のいう「ひと―こころ系」の生活文化の1つとみてよいだろう。それはビリーフあるいは世界観と呼ばれ、個別内面的な主観的・観念的世界に属する一方、その人の生まれた環境、自然、社会、文化環境が影響し、現実に対応して形成されるものである（米山 1995：27-28）。

2.2 世代

世代は、自明な実体ではない。一般的にも学術研究においても、世代は、時代、コーホート、家族リネージといった異なる意味合いで自在に使われてきた。在日韓国・朝鮮人を研究対象にしてきた筆者も、移住者を起点とするリネージ上の位置という意味での世代概念の有効性をほとんど疑っていなかった。インタビューでも「あの世代は」というもっともらしい言い回しによく出会う。とはいえ、実に多義的で、錯綜した現実を抱え込む概念である。もし世代を厳密に規定しようとして、親の複数回の結婚や、同じきょうだいでも出生が親の渡日の前か後かなどを考慮すると、世代記述はあっという間に複雑になる。かといって家族の多様な現実を捨象すると、事例の重要ポイントを捉え損ねる。分析が細かすぎるか逆に雑にならざるをえない、使えない視点なのだろうか。

社会学は手をこまねいてきたわけではない。早くはK.マンハイムの世代論がある。マンハイムは、人々を単に生年で区分することを疑わない自然主義的世代観に異を唱え、現実の社会事象を分析する社会科学概念としての世代を鍛えようとした（マンハイム 1928=1976）。これを実践するのがコーホート分析であり、マンハイムのいう世代状態を捉える方法である（澤井 2004：62）。

金明秀・稲月正は、年齢層で代用して在日韓国

人の世代間社会移動の分析を行った（金・稲月2000）[5]。樋口直人も、生年ごとに傾向が異なる在日コリアンの職業・従業上の地位の推移の分析を行った（2016）。これらの研究は、社会移動上の民族差別による不平等とその長期的な緩和傾向などを明らかにした。コーホートは定義としても変数としても明確であり、結果を数値で明示できる道具立てである。ただ、コーホート間の差の説明において、その解釈が妥当なのかよくわからないことがある。マンハイムのいう世代連関、すなわち、同じ世代状態に属する人々が「共通の運命」を体験し、それに刻印づけられるという社会事象（澤井 2004：61）をつかもうとしたら、数値だけの表現には限界がある。

その点で、谷富夫らの世代間生活史法調査は、対象親族の複数成員に具体的な経験や考えを聞き取り、世代間の相互関係や差異が生じるポイントに迫った意義がある。さらに、語り手がどの時期に十代を生きたかによって「戦前移住」「戦後」「成長期」「定住」各世代に分け、親族全体でみた世代関係のダイナミクスを描いた（谷編 2002：40-41）。図式的ではあるが、リネージ（家族内位置）とコーホート（歴史時間）を組み合わせたミクロ・マクロな世代分析を、多数の研究参加者のチームワークによって実現している[6]。

研究目的に応じてさまざまな世代区分を設定することに異論はなく、本稿も唯一の万能な世代概念を求めるのではない。上述したような、移住からのリネージ的位置や歴史時間の意味にはやはり何らかの有効性がありそうに見える[7]。また血統上の系譜も、絶対化は避けるべきだが、当事者にとっては重みがある条件であるだろう。これら複数の世代観を踏まえつつ、本稿は、生活文化の継承という問題関心に応えるための柔軟で複合的な世代論に取り組んでみたい。

3.「2 世」Aさんへのインタビュー

3.1　調査概要

本研究チームの 4 人は 2015 年 2 月、西日本A県を訪ね、Aさんほかへのインタビュー調査を実施した[8]。この半年前、チームの髙があるイベントでAさんの長女Adさんと知り合い、「2 世」である実家のご両親を紹介してもらったのである。インタビューの前の週には、髙が予備調査にAさんを訪ねている。

インタビューは基本的に日本語で行ったが、ときどき朝鮮語が混じった。以下では、Aさんの事例を紹介・分析していくが、家族に言及するときはAさんからみた親族名詞を用い、変則的であるがAさんの父親を「アボジ」（お父さん）、生物学的母親を「生母」、父の再婚による母親を「継母」（Aさんはオモニ（お母さん）と呼んでいた）と記述する。調査者らがAさんに呼び掛けるときは、「先生」の意味をもつとともに朝鮮の一般的敬称である「ソンセンニム」あるいは「先生」とした。

3.2　Aさんと家族のプロフィール

Aさんはインタビュー時点で 65 歳、A県A市在住の男性である。3 人の子どもたちはそれぞれ自立して家庭を持ち、妻aさんと 2 人暮らし。aさんが切り盛りする焼肉店で、「何も専務」と冗談を言いながらホールに立つ。

Aさんは、済州島東部から 1940 年に渡日したアボジ（1923 年生まれ）と、北海道出身の日本人女性の夫婦の長男としてA県で生まれた。幼い頃は両親と姉と妹との 5 人家族だった。生母が肺の病気で入院したのはAさんが 5〜6 歳のとき。お見舞いに行くことはあったが、生母と暮らした記憶はない。母は 1 人になるのがさみしかったのか娘 2 人を呼び寄せて近くの孤児院に預け、Aさんだけがずっとアボジのもとにいた。そして 9 歳のとき、母が亡くなった。アボジは 2 人の娘たちを引き取り、子供 3 人との暮らしが始まった。しかし時間的にも経済的にも、子育てにかける余裕

などない生活だった。

当時は県内のＢ郡に住んでいた。近隣に住む同郷朝鮮人たちのまとめ役的存在だったサンチュン（おじさん）を中心に、朝鮮人の世帯が数軒集まっていたが、集落にはどちらかというと日本人住民の方が多かった。Ａさんは小学校５年まで地元の公立学校に通ったが、その後Ａ市の朝鮮学校に転校し、寄宿舎生活となった。

生母亡き後は一家でＡ市に移り、そこでアボジは総連組織の専従となった。ところが、今度は姉が心臓を患って亡くなってしまう。それを見かねたサンチュンは、アボジに、「このままでは子供が全部（参ってしまう）、殺してしまうから、再婚しろ」と言うのだった。アボジは絶対再婚しないと言ったが、最後は折れた。Ａさんが中学１年のときである。

継母も済州島出身の人だった。若い頃から家族を助けるために海女になり、故郷で結婚するが、次男が小児まひにかかり、そのうちに夫が亡くなってしまう。継母は自分が犠牲になって子供の病気を治するつもりで大阪に出て来た。そんなとき、在留問題で世話してくれたアボジとの結婚を人に勧められた。そんな自分の身の上話を、後に継母はＡさんにしてくれた。

家で生活文化について学ぶ機会があったかと尋ねると、Ａさんは次のように話した。

> ナヌン（私は）オモニがイルボンサラミ（日本人）だったんだけど、早くに亡くなったんですね。それで育ての親がチェジュサラミニカ（済州島の人だから）、なんぼまま母だとしても、生活の中での影響はあるでしょうね。それと、言葉を中心とした文化の伝承かな。僕の場合は両方あるんだけどね、我々のチョソンサラム（朝鮮人）としての文化とか、日本の文化も受けたことはあるけどね。アボジがそういう生活をしてきたから。歌一つにしても、（日本の）昔の流行歌をアボジ、歌ってたから。そこを私が聞いて自然に習ったのもあるし。朝鮮の昔からある演歌をレコードを通じて歌ったりしたり。また在日の文化もあるし。

文化が混成した中で育ったＡさんだが、自らは「チョソンサラム」だと規定する。

> それは、アボジがチョソンサラムだったからチョソンサラムっていうんではないけども、チョソンサラムとして育ってきたからね。だからチョソンサラムだからって意固地になるとかそういうことじゃなしに、人間として恥ずかしくない形で、堂々と人前で、「ネアボジヌンチョソンサラミゴ、ナエオモニヌンイルボンサラミダ（私の父は朝鮮人で、私の母は日本人だ）」って堂々と言える。これが根っこなんです。自分の自主的な、プリエテヘソ（根に対して）恥ずかしくなく堂々と言う。（中略）こういう人間が生きるのは、この60何年間、たいへんでしたよ、それは。

チョソンサラムすなわち朝鮮人だと言う根拠は、血統でも国籍でもなく、朝鮮人として育ってきた事実にあるという。朝鮮人ということ自体が「こだわりではない」。出自を人前で堂々と言えること、それが「根っこ」だという。しかしそれは容易なことではなかった。なぜなら生母が日本人であることから同胞社会で受け入れてもらえないことがあったり、逆に日本社会でも、母が日本人だからといって大事にされたわけではなかったのだ。むしろ自身が自己に堂々と向き合えるかどうかが、Ａさんにとっては重要だったようである。

Ａさんは朝鮮人だと自称した。では世代はどう表現したかというと、状況的に「2世」だととれるのだが、自分が何世かは実際には１度も言わなかったのである。アボジを「1世」と言い、同年代の高や妻aさんに言及して「2世」と言った。しかし、自身については世代表現をしていない。たまたまなのか、考えがあってのことだったのか

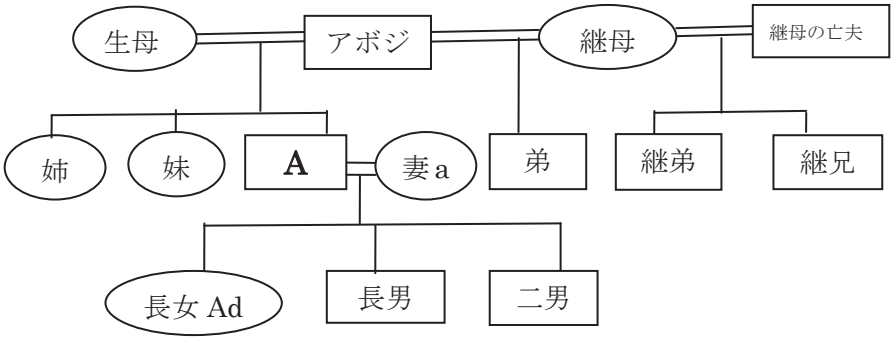

図１　Ａさんの家族（□男性、○女性）

わからないが、本稿もあえて特定せず、Ａさんのこの曖昧な世代帰属を広い文脈から捉えてみる。

４．Ａさんの実際の仕事および仕事観

Ａさんは朝鮮大学校卒業後、時に朝鮮学校教員として、あとは朝鮮総連の支部や傘下機関の専従職員として、定年まで民族組織の中で勤め上げた。現在は、必要があれば総連系列のボランティアをしたり、妻の焼肉屋が忙しいとき店に少し出たりするくらいだという。

本節では、Ａさんの仕事および仕事観の多義性を示すため、仕事に関する語りを３つのレベルに分けて拾い出す。一口に仕事といっても当事者の主観的意味づけが異なるこれらは、Ａさんの人生で併存してきた。

次は、職歴を一通り話してもらった後のやりとりである。３つのレベルの仕事が出てくる。

（以下、［ ］内はインタビュアー部分。下線部はリネージ世代に言及した箇所で、後で考察。）

［橋本：組織の活動が長かったのですね］
うちのアボジ自身がね、今はシステム化されて、専従とかだけど、昔は昼間豚飼って、夜同胞の家行ったりね。そういうのを意を継いだというか。
［橋本：「天職を知ってそれを実現することが人の道だ」という（Ａさん自筆の）色紙[9]がありましたけど、先生は自分としては何を天職と置いているんだろうと、聞きたかったんです。］
・・・それこそ、自分の子供たちの話になるけども、Ad（長女）、大学の先生をしてる末っ子（次男）、朝銀（総連系の民族金融機関）に勤めてる長男によく言うのは、そこに書いたようなこと。<u>高ソンセンともそういう話したけども、やはり２世の場合は非常に難しいと思うんですね</u>。（中略）私の場合は、「これをやりたい、あれがやりたい」とかは確かにあったんです。それが天職かは別としてもね。必ずしも私がそれができたかと言うと、時代の流れでそれがなかなかできなかった。先生もしたり、ボランティアの組織活動もしたり、今だったら○○相談所もしたり（笑）。基本、ベースにあるのは、同胞社会において、一世を含めた同胞の方のお手伝いとかそういうのをするのが、自分の、職というよりも、定めなんだろうなというのは、常々思ってました。例えば職業として、いろんな新聞記者になりたいとか、アナウンサーになりたいとか、芸術家とか、そういうのもあったけども、どれが天職だったかと思ったら、自分はベースでしか思えないんだろうなと、そういうのはあります。後悔というのではな

いです。例えば商売人として何かをするというのは全くゼロだったろうと思う。
［橋本：自分の利益より人のためになることっていうか？］
人のためっていうんじゃないけども、それが身近にあったから［[語調強め]]、そうなったんでしょう。

この引用部分で、仕事に関連する要素が複数語られた。1つは「天職」（①）である。この観念的な質問に対し、Aさんは、まず子供たちの職業達成に触れ、一方で自分がやりたかった職業は「時代の流れ」で難しかったと語った。また後半で再び「天職」に触れ、組織の職にあったことを「後悔ではない」とした。同胞社会で同胞の手伝いをすることが「定め」で「天職だった」と過去形で話したが、「身近にあったからそうなった」という説明とともに、自分で選んだというよりも自分を納得させた結果の表現であるように思われる。なお、就きたかったという職業は何だったのか、インタビューでは聞きそびれてしまった。

2つ目に、実際に就いていた職業（②）、すなわち総連組織下の専従職員および教員として働いたことが挙げられる。教職にもともとこだわったわけではなく、高校の恩師に推薦されて師範科に進んだことで将来が決まっていった。また組織活動には「ボランティアの」という形容がついている。朝鮮学校や総連からの給料だけでは生活できないので、半ば奉仕活動といった意味を込めたのだろう。

3つ目は、生存手段としての仕事（③）で、ここではアボジが夜に組織活動する一方で「昼間豚飼って」いたというのがそれに当たる。同様に、Aさんの生計手段は、ここでは明示されていないがおそらく妻の営む焼肉屋が支えてきたと推察される。

これら3要素は一見バラバラである。しかし、③があるから②が成り立ったし、②を①と自ら読み直すといった連関があって、Aさんの仕事人生はまわってきたのである。

「天職」の文脈で子供らの職業を語ることに留意しておきたい。また最初の応答で「アボジの意を継いだ」とあり、一方で（継母がしたような）商売の可能性は「全くゼロだった」とあるように、Aさんは渡日1世の親がしてきたことを自身に引き付けて、または距離を置いて認識する。こうしたAさんの複数の仕事観の形成を、世代関係と絡めて、より具体的に見ていこう。

5. 仕事観の継承・形成の語り

ここではアボジおよび継母、そして時間的に後の話になるが長女についてのライフストーリーを読む。3人の話はそれぞれ①天職、②職業、③生業のバランスにおいて異なっており、それらが総合してAさん自身の仕事観を構成する。

5.1　アボジの背中からつながる「道」

Aさんが子どもの頃に住んだB集落の朝鮮人は、たいてい養豚と焼酎密造で暮らしを立てていた。家のすぐ横には豚舎があり、その横には精酒所があった。朝鮮人たちはそれらを共同で建てて運営し、ローテーションで器具を使って焼酎を製造し、税務署の手入れがあれば総出で隠すなど、融通し合ってその空間をベースに生活していた。集落では日本人住民も、材木を売ったり、豚のえさになる残飯を提供したりと、何かしら関わりがあった。幼い日のA少年はアボジの手伝いをずっとしてきた。1世たちからは、Aさんが小柄なのはこのとき重たいものを運んだせいだと言われるそうだ。

しかしアボジからの影響は、生業ではなく、むしろ「ボランティア」から受けている。そしてAさんの人生に最も大きな影響を与えたのはアボジであるという。「1世ってみんなそうだと思うけども、あまりにも波乱万丈なことがあるから、全く自分も（同じように）するんではないけど」、またアボジが直接あれこれ教えてくれることはなかったけれど、Aさんの中では明白である。

日本の言葉でいうと、「親の背中を見て生きた」、じゃないけどね。アボジ自身が同胞社会でボランティア的なことをずっとやってたから、その背中を見てたから、おのずとその道を歩んできたんでしょうね。そこにおいての尊敬という面から、親に対する。あまり親と語りはしなかった。私もそうだけど、職業上語ることはあったけども、面と向かって酒交わしながらってことはなかった。でも背中見てたから、気持ち的には通じてた。チラッチラッと、子供ながら、自分に対する、人前では言わないけど陰で私を見てるな、とか。そういうところで消化してたかな。

忙しいアボジの分もAさんを育ててくれたのは、日本人をも含む周りの大人たちであった。饅頭屋の前を通れば声を掛けられて1つもらい、同級生の家に行けば蒸かしイモをごちそうになった。当時の子どもはみんなたくましく生きていたとは言うが、Aさんの家には家財道具がほとんどなかったし、着た服で覚えているのは1着きり、家で食事した記憶も継母が来る以前のものはない。アボジの再婚は一家の生活の転機となった。

Aさんの仕事には直接関係ないが、Aさんが生まれる前、アボジにはかつて別な職業があった。アボジは日本に来てから朝鮮解放前後まで、きょうだい2人で楽団を組み、全国をまわる音楽活動を本業としていたのである。

楽団活動をやめた後も、集落の同胞がたくさん集まって農楽を楽しむとき、また家にいるとき、アボジはいつも歌っていた。チャンゴとケンガリとチンとプクといった基本的な民族楽器はなんでもできた。アボジは自分からAさんに楽団の話をすることはなく、Aさんは断片的な会話や写真や人伝にアボジの音楽稼業を知った。

アボジの場合はなかなか、外面はよかったんだろうけど、うちでは常々何もしなかったから（笑）。ただ文化的な面でね、そのとき集落とか寄合とか、自然な成り行きで食事をする場合が多いじゃないですか。そこで絶えず歌ったり踊ったりするのに、アボジは好きだったからね、歌を歌ったり、チャンゴを叩いたり、そういうのをずっと幼い頃から見てたから、文化の継承としてはあったでしょうね。のちにハッキョ（朝鮮学校）で歌とか音楽とか習うときに、すでにそういう意識は頭にあったから、自然とそういうのは。

子どもの頃から、Aさんの家にはいつも音楽があった。1世にとって、チャンゴを持って叩くのはごく自然なことだっただろう。Aさんも、「リズムとかそういうのは、習わずして自分の体の中に」刻まれていて、何かの集まりがあるといち早くチャンゴを叩いた。アボジはそれを止めて自分がするようなことはなく、Aさんが人前で歌ったりチャンゴを叩いたりするのを喜んでいたようだ。

無口なアボジは多くを語らなかったが、Aさんはアボジのことを「語らずしもわかってる」、ステップファミリーゆえに生じる複雑な感情はあったが父の思いも「男同士だからわかるんですよ、私は、子供ながらも」という感覚があった。

アボジと同じ「道」を歩くこと、すなわち組織の「ボランティア」に従事しつつ、妻＝一家の大黒柱を手伝うスタイルに、Aさんも落ち着いたという結果は、偶然ではないように思われる。アボジは、Aさんの長女が小学1年生の時に他界した。

5.2　継母の商売の「道」と手伝い

アボジが同胞の生活支援や識字活動といった収入に結び付かない仕事をしたのに対し、Aさんが中1の時に来た新しい母親は家に収入をもたらした。アボジは蓄音器を買い入れ、長男であるAさんはよくしてもらって高校進学もできた。当時Aさんは寮生活をしていたが、帰省すれば、アボジ好みの簡単な済州島料理を食べることができた。

継母は日本に来てからも、プロの海女として、また民族服の販売製造、行商、後には焼肉店など

をして、幅広くよく働いた。「質素な生活をされる方で、仕事しかしない、自分を着飾ることをしない」、その意味で「良き母」だった。

［猿橋：じゃあ家ではミシンのカタカタカタっていうのがいつも鳴ってて？］
うん。だからオモニもそこに、アボジもたまに手伝ったり。私らは特に、トンジョン（白いかけ襟）つけるくらいしかなかったけども。アボジは案外器用だったから、ちょこちょこっとしたもの手伝ったりして。

継母が仕事に励んだのは、収入に結び付かない組織活動に勤しむアボジの分まで稼ぐ必要があったからでもあるだろう[10]。そんな継母の商売を家族は総出で手伝い、アボジも「なんでもした」。

無口なアボジとはひざを突き合わせて語り合うことがなかった一方、継母とは大人になってから、いろいろ話をする機会ができた。Aさんが結婚前に月2回ほど、継母が行商で近隣の府県をまわるのを運転手役で手伝ったときである。継母の商売の才覚を間近で見て、身の上話を聞き、Aさんは継母への尊敬の念や理解を深めた。いくつか逸話がある。

私が会得してない商才、いわゆる商いの才能、私が感心したのはね。このオモニは商売に関してはあれがあるんだなと。非常に上手ですよ。例えば、私を連れて洋服を買いに行ってくれたんです。すると、大阪でそうだったからそうなのかもしれないんだけど、パッと洋服、コートでも見てね、値段は書いてあるんですけど、向こうの言い値じゃないんです。こちらの言い値でオモニは買うんです。「私も洋服の関係の仕事してますけど、これはなんぼでいけるでしょ」、そう言いながら自分でお金を先に渡すんです。値切りじゃないけど、むこうはもう「参ります」、そういう感じで商売する。

Aさんは「私が商売の道に目覚めてたら、相当オモニと何かやったでしょうね」と想像する。商売以外の人生哲学に触れることもあった。

一時ね、オモニを連れて運転したとき、私がスピード違反をやったんです。もう悔しくてね。それが何万でしょ。アボジ、オモニが必死で働いたそのお金が、なくなるわけじゃないですか。私が払えないんだから、オモニが払うんだから。それが悔しくて、警察で、私はそう思わなかったんだけども、けっこうな時間押し問答をしたみたい。そしたら初めてオモニがね、後々に私に言ったけど、「こいつは、よく言えば強い子だけども、強情が過ぎる、怖いくらい」と。そんな話を車でしたり（笑）。ほんとに、親子の会話ですよ。それまで私ができなかった親子の会話を、車の中でしました。「商売はこうなんだよ」とか。よく言われたのは、「お金は追いかけたらダメなんだ、お金は追いかけたら逃げるんだ」って。お金がいるからってどんどんどんどん追いかけるじゃないですか、そうするとお金は逃げていく。だから、そういうことじゃなしにドーンと構えて、お金があるところにお金が回ってくる。動かさないとお金は来ない。（中略）たとえば誰か来たとか、何かしたときに、使うときのお金は使わなくちゃダメだって。何でもケチケチしたり、お金を留めておくと、そこに止まって、お金はなくなっていく。そういう話も、オモニはされてました。

継母は、「諦めて、サッとその次のことをせにゃダメなんだということ」を話し、Aさんは「ああそうなんだ」と教えられた。

Aさんは言う。「商売人としては尊敬してます」。しかし、商売を「自分の仕事とは思わなかった」。アボジの「背中を見て」育ち、その道を自分も歩んだと語ったのとは対照的である。継母からは仕

事・仕事観を継承したのではないが、生業としての意義をAさんは経験的に認めており、受容の一つの形とは言えるかもしれない。

5.3　娘が進む「道」

長女Adさんが朝鮮初級学校（小学校）に入るときのことである。Aさんは、子供にできるだけの教育を受けさせてやりたい思いがあり、特にピアノはできた方がいいと考えていた。aさんも賛成した。Aさん自身も、aさんも少し、ピアノが弾ける。そんな矢先、アボジと継母が2人でピアノをプレゼントしてくれた。アボジたちには高価な買い物だったはずだ。孫をかわいがる気持ちの表れだったのか。ピアノについてAさんと同じ考えだったのか。

> ［橋本：ソンセニム、なんでピアノを習わせたいと思ったんですか？］
> うーん・・・まあ、ピアノが全ての音楽の基本だということもあるけど、やはりそういう感覚は植えられていたからね。芸術的なものに関して言えば。それでピアニストになりなさいというんじゃないけども、ピアノは習った方がいいという。

Adさんはその後一番高いレベルまで習い、音楽に関わり続け[11]、現在は朝鮮民謡の歌手である。アボジはその姿を見ていない。しかし娘がこの仕事をしていることに、Aさんは、民族文化の世代間伝達の発現を見てとる。

> 60年間の私の人生を振り返ってみると、アボジというか1世から引き継いだ、体に染みた民族文化的な要素、そういうのが自然体で、私の体から子供たちに伝わっていって。その伝わったものが、自分の子供たちが過ごしたウリハッキョなり同胞社会なり、もしくはAdの場合は、いい人に巡り合えたかな。たとえば共和国に行って勉強もできたし、我々が考えられなかったけど、留学できたし。韓国に行って専門の先生と接することができたし。公演に行ったときに、在日の若い子が民謡を歌ってるということで向こうで関心を寄せられたことがあったし。今だにあれは続いてます。もちろん共和国には、年1回くらい行ってレッスンを受けてますけど。アメリカや中国公演というのは特例としても、そういう中でそういう道の人たちからいろんな教えをもらったり、かわいがられたりしたのは大きいね。だから自分は在日ではあるけど、歌を通じて自分の幸せというかを表現したいし、在日の人たちに力を与えたいというのは、理屈じゃなしに、彼女の人生において体に染みついてるから。そういう意味ではA氏、A家から見ると、民族文化の伝達であったり伝承であったりそういうのじゃないかな、と。

「そういう道」に身を置くことで、Adさんは民族文化をA家の文脈で継承する。それだけにとどまらず、より幅広い在日の人たちと関わる機会があり、朝鮮民主主義人民共和国や韓国その他の国の同じ専門の人と共有できるものがある。そうした仕事をAdさんができていることを、Aさんは「ありがたい」と話した。

> （Adは）退団した後もそういう活動をするでしょう。形態は違っても。私が、同胞社会とか学校とか、そういう専任の仕事を終えてでも、何かしら関わりを持ってるじゃないですか。それと同じように。誰かに言われたからするとか、義務的とかそんなじゃなしに、自然と。

Adさん本人の退職後の意向はわからないが、父親のAさんからみて「天職」といえるのだろう。Aさんは「時代の流れ」で職業的な夢を果たせなかったけれども、子供たちは自らの望む仕事に就き、そこからさまざまな出会いに恵まれ、職業人

生を豊かにすることができた。

朝鮮学校に通ったAさんの人生は、同胞社会のウェイトが高く、その中で受けた影響に規定されている部分が確かにあるのをAさんは感じる。「一番難しい血気盛んな時代を、一番難しい日本の社会の中で生きるから、いろんなものの矛盾だとか迫害だとか蔑視だとかは体験的にした」。だからと言って、それで長年組織で働くよう強制されたのではない。自ら選んだわけでもないが、引き受けて続けてきたのは「自然」だった。Adさんにとっての歌も似たイメージで、Aさんは捉えているようだ。

Aさん自身は音楽を仕事にはしていない。しかし音楽が媒介する、アボジ、Aさん、Adさんという親子3代の流れがあるように思われた。生活の中の楽しみ、子供世代に伝えたいもの、同胞と分かち合うものとして。また組織で働くことも、所属という点以外に、身近な同胞社会に「ベース」を置くという点で、3世代共通している。

6. 縦の世代関係と横の世代関係

定義次第で、世代によるさまざまなカテゴリー化が可能であるが、自由自在に世代を論じようとしているのではない。ここでいったん仕事観に限定せずに、縦の世代／横の世代すなわち通時的／共時的なAさんの社会関係を考えてみる。

縦の世代とは、時間差を含意した年長者・年少者との連なりであり、典型は親子リネージである。例えば次のような語りがある。「親、1世は向こうで暮らして、いろんな事情で出てきたけれども、我々はこのままここで居座って。じゃあ、我々の子供たち、孫たちは、ここで埋もれていくのか。人間として埋没するのはイヤだろう」。ここで「我々」とは、渡日1世の親と自らの子供の間に位置する在日韓国・朝鮮人2世一般を指す。一方、横の世代関係とは、経験の類似・共有がある同時代者のことである。例えば、調査メンバーの高や妻aさんに言及したときに想定する「2世」の集合に、Aさん自身を含める場合である。世代連関、すなわち、ある現実の社会的・精神的内容が同一の世代状態に属する人びとのあいだに作り出す一つの具体的な連結（Manheim 1918=1967：194）は、横の世代関係において生まれる。

Aさんの位置は、縦の世代と横の世代が交差するところに認められるのではないだろうか。第3節以降で下線を引いた、世代に関するAさんの語りの引用部分には、そうした縦と横の世代関係の組み合わせがうかがえる。縦の世代関係は連続するが不可逆的である。生母との死別やアボジの再婚、継母の事情の理解など、複雑な出身家族内で何度も困難があった。横の世代でも、日本人との間には差別をはらんだ関係があったし、同胞社会でも冷遇され、同輩集団への同一化に慎重な語りとなった。しかし互いに共感できる関係もある。縦・横のラインともに安住はしにくいその位置を、Aさんは受け入れるしかなかった。Aさんはそこに自らの「根っこ」を見出すのである。

7. おわりに

本来やりたかった職に就けないこと、食っていけない仕事は、本人にはつらいだろう。しかし仕事観は、単に好き嫌いだけではなく、社会生活の複数の側面や人生経験から全体を成しており、多くの思いを含んでいる。

波乱万丈だがルーツに迷いはない渡日1世と、日本生活が前提となりかつ自己実現の可能性が開けてきた若い世代との間にあり、また出自の条件から難しいことが多かった60数年間。それでもAさんは自分の置かれた状況を理解して受入れ、感情を抑えつつ、同輩の人びとととともに成長し、一定の仕事人生を送ってきた。仕事観が、仕事そのものから生じたというよりも、周囲の環境、特に親や同年代の同胞、子供が育つ過程で形成され、意味づけられた一例を本稿は示すことができただろうか。たとえ2世と呼べなくても、Aさんを在日韓国・朝鮮人1世からの生活文化の継承主体と

言ってよいのではないだろうか。

付記：本研究はJSPS 科研費 26380727 の助成を受けている。また、本稿をまとめるにあたり、第89回日本社会学会大会テーマセッションの司会者、参加者、さらに共同研究者から有益なコメントをいただいた。そしてインタビュー調査に協力くださったAさんに、深く感謝申し上げます。

注

1）1998年の改正国籍法施行により韓国でも父母両系主義が採用され、父系でない姓承継も可能になった。また2008年には戸籍法が廃止されて個人ごとの家族関係登録制度に変わり、在外国民にも適用されている（「定住外国人と家族法」研究会2010）。このため現在制度上は以前のように厳格な父系主義ではない。ただし習慣・社会意識レベルでは、そうすぐには変わらないと推察される。

2）ある在日朝鮮人男性が、日本人女性が一般に戸籍や姓を夫に合わせることをもって、そのような「男性の方に入る」民族間結婚は問題ないと話したことがある（橋本2013：189）。今回の調査がAさんにたどり着いた背景にも同様の結婚観があった。共同研究者の高が、30代のAdさんに「1世」の祖父の話を聞き、その息子AさんにAdさんを通じて協力依頼した。予備調査でAさんの生母が日本人とわかったけれども、そのような結婚は珍しくないのであまり気にしなかったという。母方カウントの世代規定では当事者のリアリティと距離があったために起こった混乱である。

3）例えば『在日一世の記憶』という聞き書き集には、実は日本生まれの人や、日本人妻が複数収録されているが、それは偶然ではないように思われる。

4）筆者は2016年10月の日本社会学会大会のテーマセッション「『移民第二世代』への社会学的アプローチ」において、「2世」と自称したという根拠からAさんを2世と位置づけて論じた。けれどもその後再度記録を読んだところ、実はAさんは自らを2世と言ってはいなかったのだ。Aさんを2世とする前提が崩れたことから本稿は再出発した。

5）筆者が世代概念を再考する端緒は、2002年に金明秀氏が代表を務める共同研究に参加したときだった。そのとき金氏から「在日1世、2世という世代は、変数として分析に使えるのか」という問いが投げかけられたが、当時は何が問題なのか分からなかった。本稿を構想し始めてから本人に聞いてみたところ、その問いは、多義的であり不明確なのにもっともらしく見えるこの概念を使うことにより在日世代論の一人歩きに加担することへの疑念からであった。今は大いに共感する。

6）福岡安則（1993）が聞き取りした「若い世代」（主に移住3世）も、調査時点での若者という一種のコーホートによる対象設定である。

7）尹健次『「在日」の精神史』（2015）は、尹自身を含む同世代の在日韓国・朝鮮人を、赤裸々（時に露悪的）に描いており、在日2世が置かれた状況の困難さは読者を圧倒する。ところで、M.L.ハンセン（Hansen 1937→1990）の三世回帰説（二世忘却志向説）が実証的でないにもかかわらず繰り返し言及されてきているが、それは、何らかの現実を言い当てているという直感からかもしれない。

8）初日は妻aさんが営む焼肉店で開店前のaさんにインタビューし、夜は夕食をとりながらAさんから接客仕事の合間にやや一般的なお話を伺った。翌日はほぼ丸1日かけて、Aさんの運転で子どもの頃に住んだB地域や幼馴染の現在の家を一緒に回りながら、延々質問に答えていただいた。Aさんはじめ、調査でお世話になったみなさんに感謝申し上げます。

9）Aさんは書道を習っており、店のホールの品書きやトイレの壁など至る所に毛筆の掲示・色紙があった。

10）おそらく同じ事情で、Aさんが朝鮮学校教員や組織の専従として勤めたとき、アボジは、地域の1世の朝鮮人女性たちに、aさんの焼肉屋修行を委ねた。それがあって、aさんはA市内の2世の中では抜きんじて1世たちから焼肉商売を教わり、かわいがられたという。

11）Adさんの弟たちも、他の分野に興味が移って途中でやめてしまったが、ピアノを弾ける。

文献

福岡安則，1993，『在日韓国・朝鮮人――若い世代のアイデンティティ』中央公論社.

Hansen, Marcus L., 1937→1990, “The Problem of the Third Generation Immigrant［Delivered to the

Augustana Historical Society Rock Island, Ill., May 15 1937］," Peter Kivisto & Dag Blanck (eds.), *American Immigrants and Their Generation: Studies and Commentaries on the Hansen Thesis after Fifty Years*, University of Illinois Press, Urbana & Chicago, 191-203.

橋本みゆき，2013,「民族間結婚による『近さ』の再編――2人の在日朝鮮人男性の『特殊』な結婚事例から」松田素二・鄭根埴編『コリアン・ディアスポラと東アジア社会』京都大学学術出版会.

橋本みゆきほか，2015,「食における在日韓国・朝鮮人1世・2世の生活文化継承――2014年大阪調査からの予備的考察」『アジア太平洋研究センター年報』12.

樋口直人，2016,「在日コリアンの仕事の変遷」小倉紀蔵ほか『嫌韓問題の解き方――ステレオタイプを排して韓国を考える』朝日新聞出版.

金明秀・稲月正，2000,「在日韓国人の社会移動」『日本の階層システム6　階層社会から新しい市民社会へ』東京大学出版会.

マンハイム・K.，1928,（=1976鈴木広訳）「世代の問題」樺俊雄監修『マンハイム全集3』潮出版社.

小熊英二・姜尚中編，2008,『在日一世の記憶』集英社.

澤井敦，2004,『シリーズ世界の社会学・日本の社会学カール・マンハイム――時代を診断する亡命者』東信堂.

谷富夫編，2002,『民族関係における結合と分離』ミネルヴァ書房.

「定住外国人と家族法」研究会，2010,『「在日」の家族法Q&A［第3版］』日本評論社.

米山俊直，1995,「生活文化とはなにか」足立重行編『講座生活学第5巻 生活文化論』光生館.

尹健次，2015,『在日の精神史3 アイデンティティの揺らぎ』岩波書店.